

二〇二〇年度

第一回

国語入試問題

帝京高等学校

※解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
※特に指示がない限り、句読点も一字に
数えなさい。

【一】次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

日本に漢字という文字が入ってきた時から、日本の公式文書は全部漢文です。ひらがなやカタカナが生まれたって、そういうものを公式文書に ^aサイヨウしてくれるほど、日本の役所は甘くありません。(A)、「漢字は漢字、かなはかな」という別々状態が生まれていたんですね。

官庁の役人が特殊な言葉を使う——これはもう大昔からの伝統です。今では、官庁の発行するものや役人の言葉からは漢字がかなり追放されていますが、そのかわり、今度はやたらとカタカナ言葉が氾濫しています。「ミニマムなんとかかんとか」とか、「ジエネラルうんたらかんたら」とか、「ナチュラルなんとか」という類の言葉です。「公式文書には日本語化された外国語を使う」というのが日本の悪しき伝統です。きっと、「なんとかコンセンサス」というような言葉を平気で使う人たちは、そんな^①「自分たちの歴史」なんてもんを知らないでしようが。

漢字というのは、公式文書を書くための文字で、男だけが使うものでした。漢字は「男だけが使うもの」で、「漢字の本を読む女なんて気持ちが悪い」という常識が支配していたのが、平安時代です。「むずかしいものは全部漢字、かんたんなものは全部ひらがな」という両極端が、その頃でした。現代で言えば、「文章というものはすべて英語、マンガのふきだしだけが日本語」という、そんな極端さです。「漢字は男のもの、ひらがなは女のもの」という、^bゲンゼンとした区別がありました。公式文書にひらがなやカタカナを書いたらバカだと思われましたし、女が漢字の本を読んでいたら、「あんなことをしたら結婚できなくなる」と言わされました。清少納言も紫式部も、「女は、『』という漢字さえ知りません」という顔をしていなければならない」という風潮にそろつて反発していますが、極端なことを言えば、漢数字の「一、二、三」だって、女なら「いち、に、さん」と書かなきやいけないような^cジョウキョウがあつたのです。

紀貫之の書いた『土佐日記』は、『をこもすなる日記といふものををむなもしてみむとしてするなり』で始まります。「日記」以外の文字はみんなひらがなです。漢字をあてはめれば、『男もすなる日記といふものを女もしてみむとしてるなり』です。「男も書くという日記を、女も書いてみようと思って書きます」という意味です。

『土佐日記』は、そういう「女の書いた日記」なんですが、作者の紀貫之は、もちろん男です。なんだって、わざわざ男が“女”的ふりをして日記を書いたんでしょう？紀貫之は、『古今和歌集』の選者せんじやでもあるような平安時代の有名な歌人ですが、この『土佐日記』を書いた時にはかなりの年でした。七十年代か、もしかしたら八十歳くらいになっていたかもしれません。なんでそんな年で“女”になつたんでしょう？年とつて変態になつたんでしょうか？まさか。

平安時代に、「日記」というものは、男が書きました。「日記」を書く文体は、漢文にきまつていました。女が漢字の本を読んでいるだけでへんな顔をされる平安時代なんですから、これはとても女の書くようなものではありません。だから、「男もする（男もするらしい）」です。この時代は男女の区別がはつきりしていて、「女が漢字を読めたらへン」なんですから、女が男のしていることにクワ^dしつかつたら、これもやっぱりヘンでしょう。それだから、紀貫之が“女”になつて書いた『土佐日記』は、「男がする」ではなくて、「男もするらしい」という婉曲表現えんきょくひょうげんで始まるのでしよう。「男もする」の「なる」は、推量の意味です。

当時の「日記」は「男の書くもの」で、女が書くものではありませんでした。（B）それを、^②紀貫之はわざわざ“女”になつて書いてみたんです。どうしてでしょう？

私は、紀貫之が「有名な歌人」だったからだと思います。

和歌というものは、（1）で書きます。「男とは漢字の文章を書くもの」という常識の支配していた時代に、この紀貫之は、男のくせに「（2）を扱う名人」だったのです。だから、紀貫之は「（3）の文章」を書いたのです。

「漢字の文章を書くのは男だけ」という常識の支配している時代に、「（4）の文章」は「女しか書かないもの」です。「ひらがな使いの名人」が、自分のその特技を生かして文章を書くとなると、“女”になつて書くしかなかつた—平安時代というのは、そんな不便な時代でもあつたのです。

当時の公式文書はみんな漢文で、社会人である男にとつて、「漢文を書く」というのは、必須常識でした。逆に言えば、「男は漢文以外の文章を書けなかつた」ということです。「日記」というのは、そういう男が書くんですから、文章はもちらん「漢文」で、内容だつて、「自分のこと」ではありません。「世の中のこと」や「政界メモ」みたいなものです。今でも、政

治家の日記が時々「政界秘話」という形で出版されますが、漢文で書かれた平安貴族の日記も、そういう種類のものだったのです。『土佐日記』は、一人の女性が土佐（高知県）から京都まで旅行する間の記録ですが、当時にはそんな「日記」なんかなかつたのです。

紀貫之は、そういう、當時としてはいたつて変わつた内容の「日記」を、わざわざ“女”になつて書きました。歌人であつた紀貫之は、同時に“中央政府の役人”でした。役人の彼は、実際に地方長官として土佐へ行つたんです。そういう経験があつた彼は、自分の経験したことを、「女の書くひらがなの日記」という形で書いたんです。「日記」というよりは、「日記の形をした小説^{フクション}」と言うべきものでしようけれどもね。紀貫之が書いたのは、そういう種類のものでした。

(C) 平安時代は「女流文学の時代」です。この時代には、右大将道綱の母による『蜻蛉日記』や、『和泉式部日記』『紫式部日記』、菅原孝標の女による『更級日記』といつたぐあいに、女たちの日記文学の名作がいっぱいあります。清少納言の書いた『枕草子』だつて、「ひらがなの文章」です。だから、うつかりするとカン違いをしてしまいます——「紀貫之は、そういう女流文学の真似をしようと思つて『土佐日記』を書いたのではないか」と。でもそれは間違いです。紀貫之は、そういう女性達よりも前の時代に生きていた人だからです。時代順からいって、紀貫之の方が先です。事実は、「紀貫之の『土佐日記』があつたからこそ、後の時代の女性たちは自由にひらがなの文章を書くことができた」なのです。^③ 紀貫之が『土佐日記』を書かなかつたら、後の女流文学は生まれなかつたかもしだいのです。

(『これで古典がよくわかる』橋本 治著 築摩書房)

※注1 婉曲表現……ハツキリとは言わずに、遠回しに表現すること

問1 文中の傍線部 a～d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 文中にある次の漢字の読み方を答えなさい。傍線部のあるものは、その箇所だけを答えなさい。

- ① 沔濫 ② 風潮 ③ 『古今和歌集』

問3 文中の二重線部「特殊」の対義語を次の中から選び、記号で答えなさい。

「ア 偶然 イ 平生 ウ 一般 エ 相対 オ 平均」

問4 空欄(A)～(C)に入れるのにふさわしいものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

「ア ところが イ ともすれば ウ いっぽう エ だから オ すると カ ところで」

問5 傍線部①「自分たちの歴史」を具体的に説明している部分を文中より抜き出し、その最初と最後の三文字（句読点除く）で答えなさい。

問6

傍線部②に紀貫之が『土佐日記』を「わざわざ „女“ になつて書いてみたんです」とあります、

1 筆者は紀貫之の特性をどう表現していますか、十字以内で答えなさい。

2 紀貫之が『土佐日記』を男性なのに「わざわざ „女“ になつて書い」たのはなぜですか。当時の世の中の背景をふまえて答えなさい。

3 空欄(1)～(4)にはすべて同じことばが入ります。最も適切なことばを答えなさい。

問7 文中に登場する紫式部の作品を、次の中から選び記号で答えなさい。

「ア 徒然草 イ 方丈記 ウ 平家物語 エ 伊勢物語 オ 源氏物語」

問8 傍線部③の理由としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 紀貫之ほどの政府の役人という立場の人が、ひらがなを使い、私的なことを自由に日記として書いたから。

イ 紀貫之のような歌人として立場のある人が、新しい日記文学を確立しようと役人の立場を利用して日記を書いたから。

ウ 紀貫之が当時の女流歌人の活躍を見聞きし、その女性の立場を高めようとしてあえてひらがなを使って日記を書いたから。

エ 紀貫之にしか書けない、地方長官としての苦労を公式文書化して、女性でも読めるように、あえてひらがなを使って日記を書いたから。

【二】次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい

①その公園で男の子はいつも独りぼっちでした。アパートの部屋にいると、向かいの公園から子供たちのにぎやかな声が聞こえてきて、誘われたような気がするのです。それでつい出かけていくのですが、ただ黙つてベンチに座つているだけでは誰も声をかけてくれることはありません。子どもたちはみんなそれぞれ自分たちのこと夢中でした。

しばらくそうして座つていってから、暗くなる前に部屋に帰ります。灯りをつけ、お米を研ぎ、母の帰りを待つのでした。母はとても優しいけれど、いつも忙しくてつかれているように見えました。

ある夕方、公園のベンチで本を拾いました。古い本のようでした。ちょっとページをめくつてみて、それからまた元の場所に戻しました。興味を引かれるような本ではありませんでした。白黒の写真と文字ばかりで、ところどころに茶色い染みがついていました。

本を置いたのとは反対の端に腰をかけ、楽しそうに遊ぶ子どもたちをぼんやりと見ていました。滑り台や砂場の女の子たち、走りまわる男の子たち。いつか誰かが入れてくれるかもしれない。何してるので、遊ぼ、って誘つてくれるかもしれない。男の子はその時のことときどきしました。

一人帰り、二人帰り、最後の一人になる前に急いでベンチを立ちます。公園を最後に出る時ほど心細くなる時はありません。ふと、さつきの本がベンチに残されるのがかわいそうになりました。誰かが拾つてくれるような立派な本には見えませんでした。^③男の子はさつと本をとり、夕暮れの中をアパートに向かつて駆けだしました。

きれいな絵のついた本がよかつた。白黒の本なんてつまらない。汚れているし、折れているし。本当はそう思つていました。でも、部屋には夜に向かつて時間ばかりがぼうぼうと繁つていました。男の子はまだまだ独りでした。それで、拾つた本を^④あてずっぽうに開き、そこに大きく書かれていた文字を読んだのです。

その横に、作り方、と書いてあります。ざぶんと川に飛び込んだような楽しい驚きでした。つまり、ここに書かれてい

るとおりに作ればオムライスができるということなのです。ぼくにもオムライスが作れるかも知れない、と思うと居ても立つてもいられず、思わず冷蔵庫から卵を取り出していました。

途中で母が帰ってきても、男の子は、お帰りなさい、と声をかけただけでした。いつもなら飛びついて行くのに、コンロの前を離れるわけにはいかなかつたのです。

二時間もかかつてでこぼこしたオムライスができあがつた時、男の子はまだ川の中で泳いでいるような気分でした。どうにか独りでオムライスを完成させた昂りと（A）、しかし思つたようなヒヨコ色には仕上がるなかつた（B）、包丁で切つてしまつた左手の中指の痛み、いよいよオムライスのお皿を母の前に差し出す時の（C）。いろんな気持ちの波にもまれ、足もとがおぼつかなくなりそうでした。

「……おいしいよ。」

^⑤母はそう言つたきりでした。でも、そのひと言で十分だつたのです。ぽろぽろと母のこぼす涙が男の子の胸にしみました。どうして泣いているのか、聞きたいようで聞きたくないようで、胸の中にはやっぱりさざ波が立つていてました。それからは夕方まで公園のベンチに座ることも、部屋でただぼうつと母の帰りを待つこともなくなりました。拾つた本を何度も読み、夢中で繰り返しオムライスを作りました。

いくら気をつけても焦げたり破けたりしていた卵の皮が、突然、ふわふわのところに仕上がつた日のことは忘れられません。すうごくおいしい！ と（^⑥I）を丸くした母の笑顔より、男の子のほうがもつと弾んだ顔をしていました。おいしいものを作つてもらうよりも作つてあげられるほうが、もしかしたらうれしいのかもしません。

とびきりのオムライスを作れるようになつて、独りであることを忘れました。玉葱の皮を剥きながら、ボウルで卵をかきまぜながら、わくわくしています。玉葱と卵とつながつていいるような気持ち、あるいは玉葱や卵を通して誰かつながるような気持ち、でしようか。誰とつながつているのかは、よくわかりません。母とはもちろん、この料理本を書いた人とも、この本の以前の持ち主とも、そしておいしいものを作ろうとしたり作られたりしている全ての人とも、ひつそりとゆるやかにつながつていいるような気がしています。

でも、なんといつても、男の子が一番深くつながっているのだと実感した相手は男の子自身でした。台所に立つと、なぜだか身体と気持ちの輪郭がぴたつと合って、一分の隙もなく自分自身とつながった喜びが満ちてくるのです。^⑦たとえ部屋に独りでいてももうだいじょうぶ。オムライスの次には何を作ろうか、考えるだけで力がわいてくるようなのでした。

(「オムライス」『はじめからその話をすればよかつた』所収 宮下奈都 著 実業之日本社)

問1 本文から読み取れる主人公の家族構成を書きなさい。

問2 傍線部①「その公園で男の子はいつも独りぼっちでした」とありますご、その理由の説明として最も適当なもの

を次のなかから一つ選び記号で答えなさい。

- ア 夢中で遊ぶ子供たちの様子を独りで眺めるのが好きだったから。
- イ 知らない子供たちと遊ぶことを母親に禁止させていたから。
- ウ 病弱で元気に遊ぶ子供たちの仲間にに入ることができなかつたから。

- エ 子供たちから誘われるのを待つだけで、自分からは声をかけなかつたから。

問3

傍線部②「元の場所に戻しました」とあります。が、その理由の説明として最も適当なものを次のの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 独りで本を読むことに飽きていたから。

イ 読書には興味がなかったから。

ウ 読んでみたい内容の本ではなかったから。

エ 部屋に読みたい本がたくさんあつたから。

問4

傍線部③「男の子はさつと本を取り、夕暮れの中をアパートに向かって駆け出しました。」とありますが、男の子が本を持ち帰ったのはどのような気持ちからですか。男の子の気持ちが書かれた一文を本文中より探し、最初の五字（句読点除く）を書きなさい。

問5

傍線部④「あてずっぽう」のここで意味として最も適当なものを次のの中から選び記号で答えなさい。

「ア 亂暴 イ いい加減 ウ ていねい エ 面倒」

問6

（A）・（B）・（C）に入る語句を次のの中からそれぞれ選び記号で答えなさい。

「ア 疲労 イ 緊張 ウ 無念 エ 孤独 オ 驚異」

問7

傍線部⑤「母はそう言つたきりでした。」とあります。が、この時の母の気持ちの説明として最も適当なものを次の
中から一つ選び記号で答えなさい。

ア あまりおいしくないオムライスにがっかりしている。

イ 初めてにしてはおいしくできているオムライスに驚いている。

ウ 息子が下手ながらもオムライスを作ってくれたことに感動している。

エ 自分のせいで息子に苦労をさせてしまい申し訳ないと思っている。

問8

傍線部⑥は、驚いた様子を表す慣用表現です。(I)に適当な身体の名称を入れなさい。

問9

傍線部⑦「たとえ部屋にひとりでいてももうだいじょうぶ。」とありますが、その理由の説明として最も適当なものを次の
中から選び記号で答えなさい。

ア 母親がオムライスを楽しみに早く帰つてくるようになったから。

イ 自己の存在の確かさを自覚することができたから。

ウ 将来、コックになるという目標ができたから。

エ 料理を通してたくさんの友達ができたから。

【三】次の四字熟語の漢字の誤りを正しい漢字に直しなさい。

- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 五
里 | 夢
中 | 巧
言 | 冷
色 | 危
機 |
| 公
明 | 盛
大 | 大
大 | 命
一 | 絶
命 |

受験番号

氏名

得点

【一】問1

- | | |
|---|----|
| a | 採用 |
| b | 厳然 |
| c | 状況 |
| d | 詳 |

各③点

問2

- | | |
|---|-------|
| ① | はんらん |
| ② | ふうちょう |
| ③ | こきん |

各③点

問3

- | |
|---|
| ウ |
|---|

③点

問4

- | | |
|---|---|
| A | エ |
| B | ア |
| C | カ |

各③点

問5

- | | |
|----|---|
| 最初 | 日 |
| ひ | 本 |
| ら | に |
| が | |
| な | |
| 使 | |
| い | |
| の | |
| 名 | |
| 人 | |

最後

- | | |
|---|--|
| 文 | |
| で | |
| す | |

完答で③点
③点
別解「ひらがなを
扱う名人」

問6

- | | |
|---|---|
| 1 | ひ |
| 2 | ら |
| 3 | が |
| 4 | な |
| 5 | 使 |
| 6 | い |
| 7 | の |
| 8 | 名 |
| 9 | 人 |

各③点
③点
別解「ひらがなを
扱う名人」

3
ひらがな
③点

⑦点

2
平安時代、日記などと云ふものには男の人が漢文で書いた。女に書く自分の章ひらがなした。ひらがなを支えた。ひらがなは有名な歌人である。文部省が漢文で書いた。ひらがなは平安時代の文化である。ひらがなは日本で最も有名な歌人である。

問7
才
③点

問8
ア
③点

(【二】【三】の解答欄は裏面にあります)

【三】

問9

問8

問7

問6

問5

問4

問3

問2

問1

- | | |
|---|---|
| 誤 | 夢 |
| 正 | 霧 |

完答で各②点

- | | |
|---|---|
| 誤 | 冷 |
| 正 | 令 |

④

- | | |
|---|---|
| 誤 | 盛 |
| 正 | 正 |

③

- | | |
|---|---|
| 誤 | 発 |
| 正 | 髪 |

②

- | | |
|---|---|
| 誤 | 対 |
| 正 | 体 |

①

- | |
|---|
| イ |
| 目 |

⑤点

- | |
|---|
| ウ |
| 目 |

③点

- | | |
|---|---|
| A | ア |
| B | ウ |
| C | イ |

各③点

- | |
|---|
| イ |
| ウ |

③点

- | |
|---|
| ふ |
| と |
| さ |
| つ |
| き |

③点

- | |
|---|
| ウ |
| エ |

③点

母・主人公

③点